

草津市立矢倉小学校通信 令和2年2月17日 NO.18



やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

失敗をさせないためでなく、失敗を乗り越えるために

読み書きや話し合うのが苦手だという子を対象にして、個別の学習、グループ活動などでその力を伸ばしていこうという教室が市内の小中学校6校に設置されている。「ことばの教室」「通級指導教室」というのがそれだ。矢倉小学校にも設置されていて、その取り組み状況、これからの運営の在り方について連絡会が開催された。そこである運営委員からこんなことが語られた。

「うまくできない自分の思い、気持ちがわかってもらえたということ、そして失敗した自分に大丈夫だと言ってもらえたということ、そういう経験が大切なんです。こうした経験が強く印象に残り、大人になって思い返せることができることで、生きていく上でのゆるぎない支え、思い通りにならない場を乗り越えていける力となるんです。今の世の中は、失敗させないためにあれこれ打ち合わせをし、手を尽くします。大人たちは相当な時間をかけて、問題が起こらないようにします。学校でも家庭でも・・・おかげで子どもは失敗をしたとき、うまく乗り越えることがなかなかできないようになってしまった。相談をもちかけていく、話を聞いてもらえる、しっかりと受けとめてもらえる、そういう経験の積み重ねをさせてやらないと。」

読み書きが少し苦手で、聞き取ったことをうまくメモできないために、子どもころから相当苦勞をしてきた人は少なくない。学校時代は仲間がいて、先生や親に反抗しながらもなんとかやっていたのだが・・・という具合に。市の発達支援センターで、子どもころから何やかやと相談に乗り、かかわり続けてきたからこそ言えることなのだろう。

そんな話をされるその方は、ずいぶん前にも同様のことを語っておられた。

「子どもころ、先生は『がんばれ』としか言ってくれなかった・・・これが実につらいんです。ここから学ぶべきは、まずは受けとめること、これが大切だということです。その上で、『どうしようか、どうするといいいかなあ。』とHELPサインの出し方や周囲の支えを求め、なんとかうまく切り抜けるという成功体験をしていくこと。このことの大切さを子どもたちや先生、親御さんに伝えたいんです。」

この話は、子どもにわざと失敗させよう、子どもころから楽をさせてはならないというものではもちろんない。そうではなくて、失敗や苦しいこと、やりきれないことに直面した時、その思いを仲間に伝え、わかってもらうこと、支えてもらうことが大切であり、これがうまくできるようにしていくための学びを仕組むこと、ここに大人は時間をかけていかねばならないし、知恵を出していかなければならないということである。確かに子どもには失敗させたくないし、かなしい思いはさせたくない。しかし、成功ばかりの人生はありえない。大人になってもこちらがずっとあれこれ手を出し、指図をし続けることができるかといえば、そういうわけには決していかない。とりかかる前に話しこんでおくこと以上に、とりかかったあと、ゆっくりと思いを聞き、そこで的心境を分かち合うこと、このことを大切にしたい。

校長 大林 道範